

福音主義神学における牧会学の成立と展望

藤 井 孝 夫

一

「福音主義神学における牧会学の成立と展望」という課題をとりあげるとき、まず福音主義神学 (evangelische Theologie) とは何かということが問題とされねばならぬだろう。例えばこの神学にあつては牧会学はどういう地位を占めてきたであろうか。ここでは教会の行為としては説教が重視され、場合によつては説教のみが注目され、教会は牧師職にたずさわる人間の教会運営或いは管理のための特殊の技術乃至仕事と考えられ、そのために教会は常に不当な地位に追いやられてきたのでなかつたかと思われる。少くともこと教会がまともに神学的に取上げられず十分に評価されなかつた憾みがある。いやそれよりも、果して福音主義神学において牧会学が正しく成り立つてであろうか。そういう問題にわれわれは当面する。そのために、まず福音主義神学とは何をいうのか、またそれはいかなる特色をもっているかを明らかにしなければならぬ。周知のように、それは聖書に対して、決断して自覚的に明確な一つの立

場をとった。ある決定的な解釈をしたのである。もとより、その内容を明らかにするためには歴史的な研究・検討・討議という手続をさけることができない。それは重要な仕事であると思うが、本稿の及ぶところではない。さしあたって、福音主義神学の基本的な立場乃至特色を次の三点に要約してみたいと思う。⁽¹⁾

一、福音主義神学は、人間の神認識は神の側の働き、つまり神の自己啓示の行為のみによるという立場をとる。神の行為——神からくる光によつてしか、人は神を知ることができない。「われらはあなたの光によつて光を見る」(詩三六・九)。人間の洞察力或いはその獨創性、その願望や意志によつて神をたずね、これを見出し、これを対象化して取扱うことはできない。福音において自らを人間に示す神を、その神が指示する方法に従つて知り、信じ、理解し、言い現わす。そういうことしかできないことを知っている。神学であるからには神が対象となるわけだが、しかし、自らを我として示す神がこの神学の起源でありまた規範なのである。福音主義神学は、このような自己の限界を明確に自覚し、これをこえることをしない。「福音主義神学は、正しくその対象によつてかく決定づけられた、謙遜な学問である」⁽²⁾。

二、この神の自己啓示の行為は神の言と呼ばれている。例えばイエス・キリストは神の言と云われるのである。神学を神学たらしめているのは、この言である。福音主義神学はこの神の言において成立する。これを聞き、これに答えるところでしか神学は成り立たない。この言に何かを附加したり、これをさしおいて学問的作業をするのではない。神学においても、いや神学においてこそこの神の語りかけが第一であつて、何ものもこれにとつて代ることができない。神の言に基き、言に向き直り、これに規定され、服従するのである。そして言という表現が表明しているように、そこには人格的關係が問題であつて、神を客体化して人間がこれを所有し実体的にこれを取扱うことはできない。そ

の言は人間に向けられた言、すなわち恵みの言である。福音主義神学は神の言、すなわち福音において自己を開示する神しか知らないと言わなければならない。

三、そこでは、この神の行為に当面した証人の存在とその証言とが特殊の地位を占めることになる。後の教会は、この証人たちの証言を通してしか言をうけとることができない。その証言において、またその証言を通してである(*in hoc durch*)。具体的には聖書が独自の大きい意味を持つて登場する。神学は聖書から出発し、聖書をめざし、聖書に規定される。預言者や使徒の証言をあつめたこの書が独自の権威を持ったものとして受け取られる。(1)神学はこれらの証人以上のことをなし得ない。いかなる研究もこれを越えることができない。(2)福音主義神学はこの聖書の証人たちの座を占めることができない。いかに卓越した神学も彼らと同じ地位を占めることも、これにとって代ることも出来ない。

福音主義神学はこのような立場をとっていると考えられる。しかも、極めて自覚的にである。もしそうだとすると、この神学においては、神の自己啓示の行為を現在伝達する機能をもった説教に重点が置かれているのだが、それはこの神学における必然的な帰結だといわなければならない。説教に対する著るしい傾斜が生じ、これにまつわる教会の行為、或いはその他一切の教会の行為は、第二次的・副次的な意味しか持ち得ないことになる。たとえば、福音主義神学の始源また原動力となっているルターにおいては次のように言われている。「たましいは、聖なる福音、すなわち、キリストに関して説かれた神の言以外には、たましいを生きさせ、これを義とし、これを自由にし、キリスト者とするものを、天においても地においても持たない」(「キリスト者の自由」五節)。「かくも大いなる恵みを与える神の言とは何か。また神の言を私が用いる用法は如何、とあなたは問うか。私は答える。神の言とは、福音書が含んでおる

ようなキリストについて生じた説教以外のものではない、と」(同書、六節³⁾。もつとも、これらのルターの言葉をどのように解釈するかという問題は別に残る。カルヴィンの発言についても同様である。が、神の言を伝達する機能を負わされた説教が、現在の神の語りかけ、つまり神の言としての性格を持ったものとして受け取られていることは疑い得ない(それは、神の言と説教とを直接的に同一視するものでないことは云うまでもない)。神の行為の証言たる聖書は説教において真に自己を表現し、その目的を達するものと考えられているのである。この聖文書は、単にキリスト教の真理を書き留めた文書ではない。むしろそれは説教さるべく文書化されている。先にも云ったように、神の働きかけは、事実起った。余すところなく究極的に完全にそれは現わされた。この行為を問題とする神学はいきおい、神の自己啓示の行為たる「神の言」の体系的・組織的祖述にたずさわるようになる。これに対して説教は現在の啓示についての学問 *Lehre von der Offenbarung in der Gegenwart* と解されるのである。当然と云わねばならぬ。説教は、福音主義神学にあつて確乎とした地位を要求することができるし、また事実その地位を獲得している。これに反して教会学は自ずから、より低い地位へと追いやられることになる。そしてそれが牧師の技術的職業訓練を取り扱うものとみなされるに至ったのは自然の勢であつたかも知れないのである。むしろ、そこで教会の重要性を事実的に認めている人は存在する。いや、そのような人は決して少くはないのである。しかし、彼らはこれを正しく神学的に位置づけ、評価することはできなかった。福音主義神学が、神の言に聞き、そこに一切の出発点と帰結点を置くことにおいて、教会的実践にかかわる教会学は一見なおざりにされているかのような印象をうけるのである。

が、実は一見そのように見えただけで、この神学の領域にあつて正しく教会学は注目されていたのである。例えばカール・バルトにおいても教会学は決してゆるがせにされていたわけではない。また、バルト神学を実践神学の領域

で祖述したというトゥルナイゼンのすぐれた書物も出されているのである。⁽⁴⁾ それでは、彼らはいかなる意味で牧会学を評価できたであろうか。神の言のみという立場が、啓示・聖書・説教という線で貫ぬかれている福音主義神学にあつて、その立場がそこなわれることなく、つまりのみの固有性が失われることなく、むしろそれを貫ぬいて、牧会学の成立を見ることができたか、それが問題なのである。それは説教がいかにして牧会学に通路を持ち、その両者の統一はいかにして可能かという問題でもある。

バルトやトゥルナイゼンにあつてはそれはどのように考えられているだろうか。そこでは当然のこととして、「神の言の告知、すなわち説教こそ一切の実践神学の固有の対象である」という考え方が強力に打ち出されている。⁽⁵⁾ そしてそのために、牧会がその中には入りこむ余地はないようにみえる。が、実はそうではない。何故か。牧会は彼らによつて「広義の説教」⁽⁶⁾と解されるからである。この解釈において、牧会は正当な地位を福音主義神学の中で得ることになる。牧会は説教と事実的・実質的に異なつたものではない。説教と同じく、それは神の言を告知し、伝達する機能を持つている。それは説教や聖礼典に取つて代るものでなく、ましてそれと別の事柄を取扱うものではない。正しく、説教の延長であり再演である。ただ、それが実施される場所が、教会の公同の礼拝という公の場でなくて個人のそれである。説教者は講壇をおりた場所で個人と個人とが向き合つた形で、説教を再演するのである。従つて、私的・実感的に神の言を確かめ、これを自己の所有物にすることが狙われているのではなく、どこまでもその告知が問題である。これに対しては信じるという立場しか存しない。つまり、神の言の伝達という役割を持つあの説教が必然的に牧会を要求し、説教はここで徹底し結実するものであると考えられている。それは説教だけでは不十分だから、これを補足する別の仕事としての牧会が必要であるという、「あれもこれも」の立場ではない。「説教のみ」という考え方

がここで徹底しているのである。見事に福音主義神学の立場が貫ぬかれ、その線の上で牧会学の成立の根拠づけ、またその必然性を示すということにおいて成功していると思われる。そしてこのような牧会が真に重要であり、不可欠にして必要であることは誰しも否定することが出来ないであろう。彼らの仕事は、誇張していえば、記念すべき学問的業績という意味を持つていると思われる。

二

だが、われわれは、このような牧会観を手放しで受け入れ喜んでおれるであろうか。牧会学は神の言の告知 *Verkündigung* をその内容として持つ魂の配慮 *Seelsorge* に限定されてしまつてよいであろうか。たしかに牧会は、説教において告知される神の言に基きそこから出発し、それを目指し、そこへ帰つてゆく教会の実践的な働きであるが、果してそれは、講壇で行われる説教の延長・再演ということに済ますことができるか。そこに今日の小さくない問題があると思われる。

しかし、教会はいわゆる魂の配慮では不充分である。今日の状況に適應できる新しいものを補足追加していかなければならない、というのではない。どこまでも福音主義神学の原理に従つて、神の言を問題とし、神の言そのものの理解から出発し、そこから牧会の意味と可能性とを探求することが求められているし、そうするのだからなければならないと思う。

では、神の言とは何か。プロテスタンティズムにあつて自明のこととして語りつがれている神の言とは何か。パウ・テイリツヒはわれわれの間で用いられている神の言という表現が一種の弊になっているという。それは不明確であ

いまいに呪文のように使われ、また誤まった intellectualism にこれが道を開いているという問題がある。しかし新約聖書に見られるロゴス・キリスト論こそ、このような誤解・誤謬を訂正し防衛するものである、という。⁽⁷⁾では神の言とは何か。残念ながら今、立ち入ってこれを問題にする余裕がない。『神学研究』十四号の拙稿『ことば』で貧しい見解を述べておいたので、今は「神の言」という表現に問題のあることを指摘するに留めておくことにしたい。⁽⁸⁾

ここではただ、イエス・キリストが神の言と云われていることだけを取りあげることにした。新約聖書は、言が彼において肉となった、という。聖書は、言が肉となったというこの事件を問題としている、と云ってよい。「神は、むかしは、預言者たちにより、いろいろな時に、いろいろな方法で、先祖たちに語られたが、この終りの時には、御子によって、わたしたちに語られたのである」(ヘブル一・一―二)。イエス・キリストにおいて究極的に神は語られた。イエス・キリストが神の言といわれる所以である。しかしその場合、イエスがお語りになった言葉や話がそのまま神の言なのではない。彼は神の言を語られたが、そのイエス・キリスト御自身が神の言だと云われる。神の言というとき、それは彼の行為・苦難・言葉つまり彼の言行の一切、彼の存在そのものを包含している。彼の語られた言葉は、むしろ神の言たるキリストの存在をさまざまな仕方で表現したものと云い得るだろう。新約聖書はこの神の言たる彼を証言している。福音主義神学においてこそ彼が問題なのである。牧会の意味もまた彼に注目するところから見出されねばならぬであろう。

ところで、原始教会のケリユグマは彼についてこのように語っている。「御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、聖なる霊によれば、死人からの復活により、御力をもって神の御子と定められた。これがわたしたちの主イエス・キリストである」(ローマ一・三一―四)。創造者なる神は今や彼において現わされ、神が神であることが、このナザ

レ人イエスのパーソンに貫ぬかれ現わされている。人を救う神の力は彼において顕現している。イエスにおけるこの神の行為からすると、彼は救主であり、世々の信条が言い表わしているように神自身である。「聖なる霊によれば、死人からの復活により、御力をもって神の御子と定められた」。この神の行為は、この事件に出会って神を信じた教会の宣教の働きに受け継がれ、神は今福音の説教において語る。説教において御自身の義を啓示されるのである（ローマー・一七）。すなわち、あの神の行為は今や説教と sacrament において語られ現在のものとなり、更にそれが牧会の働きに受け継がれることとなる。われわれが教会において、殊にその説教と sacrament において出会うのはこの神の行為である。

しかし、われわれがイエス・キリストというとき、そこにはダビデの子孫としての人間イエスの生涯がある。彼はダビデの末裔としての人間の生涯を送る。操り人形のように、神の子として生きたのではない。それはまさしく人間の行動であり、人間の生活であり、人間の生涯であってそれ以外ではない。彼においては人間が止揚されたのではない。まがうことのない、ダビデの血統を受け継いだ子孫であった。これが、神の言が肉となったという聖書が語っている「宣言」が指し示す事実の半面である。イエスにおける神の行為と人間イエスの行為との間には区別がある。ゆえに聖書は、彼を語るのに「肉によれば」「聖なる霊によれば」という二通りの表現をとる。その区別がありながら、神の救いの行為は、肉の人イエスの存在と切り離すことが出来ない。神の救いのわざは、肉の人イエスにおいて生じたのだ。それ以外の場においてではなかった。だから聖書は、御子は「肉によれば……」「聖なる霊によれば……」と述べ、「これがわたしたちの主イエス・キリストである」というのである。決して「これ」以外ではない。

聖なる霊からすると、そこには人間のための、人間にかかわる、人間を救う神の行為がある。それは、人間の側の

働きかけ、人間の道徳性や宗教性、人間の決断等々の人間の行為や状態とは全く無関係な、つまりそれらのものから全く自由な神の行為がある。そこには神御自身の自由な決断があり、行為があるのである。

肉によると、ただの人間がある。それが偉大なことなのである。ここには全き人間、イエスがある。人間、イエスの生活と行為がある。時間と環境に影響されその中で生きるほかない限定を持った人間の生涯がある。人間として生き、人間として死んだ人イエスがある。彼は半神でなく、天使的存在でもなく、超人でもない。人間イエスが解消されず、神に吸収されず、人間に留まり人間として生きている。それは人間としての限界と分を守ると同時にその責任を負うた人間イエスである。このイエスを直接的実体的に神的(*divine*)存在とすることは、彼を偶像化することに他ならない。

われわれがこのようなことを主張するのには次のような事情があることをつけ加えておこう。すなわち、われわれ人間は、人間であるにも拘らず真の人間であることができない。人間たることを失っているという現実がある。人間であることに耐えられず、人間たることに留まることができないで自己を神化し、偶像化することなくしては生きてゆくことができなくなっているのである。これがわれわれの罪の本源でもある。しかるに、神の力がそこで余すところなく現わされたイエスにおいては真の人がある。彼のみは真の人として終始するのである。驚くべきことに、ここには真の人がある。

divine なものは *relative* なものの中に現わされる。*half-divine* なものの中に啓示されたのではない。その両者の区別は明確である。融合することなく、吸収されることなく、同一視されることがない。しかも両者は分離されることがない。これが啓示宗教たるキリスト教の特色である。信仰だけがこの緊張関係に堪え、そこから逃げ出さないで、

この関係の中に留まるのである。時間的なものを永遠なものの中に引き上げ同化吸収するとパンシイズムとなるだろう。が、ここにはその混同は見られない。イエスはインマヌエルと云われている。マタイによる福音書ではそれが次のように云われている。「見よ、おとめがみごもつて男の子を産むであろう。その名はインマヌエルと呼ばれるであろう」。そしてこれには次の解説が加えられている。「これは『神われらと共にいます』という意味である」(マタイ一・二三)。この点が真に重要である。インマヌエル——それは神われらと共にいますという意味なのだ。神が天使や半神と共にいますというのではない。超人と共にいますのでもない。神が人と共にいる。これが聖書の告げる事実である。つまり、無時間的・哲学的存在論を語っているのではなく、このことが事実として起ったということを聖書は告げているのである。神が自己を人間、イエスにおいて現わした。それは驚くべきニュースである。然り、真に喜ばしきニュースである。しかし、これが人間にとっては徹底した躓きとなる。これが躓きでなくてなんだろうか(マタイ一三・五三―五七a)。しかし、このことが信じる者にとっては神の力であり、人間を救う力なのである。まさしくここに、人間の救いがある。

問題はこの両者の関係であろう。イエスは血肉を具えた真の人であった。それにも拘らず、このイエスにおいて神の業は完全に現わされた、というのではない。ナザレ人イエスにおいて神の自己啓示が行われたということ、彼が真の人であったということが離すことのできない関係にあるのである。前者において始めて後者が生起している。そして前者はこの後者の中で生起した。神が自己を啓示したとは人間を開示したこともあったのである。イエスにおいて神が自らを現わしたということは、とりもなおさず、イエスが真の人として終始したということでもある。彼における神の行為の故に、彼は真の人であり得たのである。彼において神と人との関係が結ばれた、と云ってもよい。

彼においては神と人とを切り離すことができない。不可分離の統一を持っているのである。われわれは、イエス・キリストが神の言であるというとき、彼が人間的主体たる真の人として終始したということを含めているということ強調した。彼においてわれわれは真の神に出会いかつ同時に真の人に出会う。神であり同時に人であったイエス・キリストがわれわれの主なのである。まさに、「肉によれがダビデの子孫から生れ、聖なる霊によれば、死人からの復活により、御力をもって神の御子と定められた。これがわたしたちの主イエス・キリストである」。なお、参考のためにニカイア・コンスタンチノポリス信条の一部を引用しておこう。

「我らは、唯一の主イエス・キリスト、あらゆる代の先きに御父より生まれたまえる、神の生みたまえる独りの御子、光より出でたる光、真の神より出でたる真の神、生まれ給いて造られず、御父と同質なる御方を信ずる。万物は主によりて成り、主は我ら人間のため、また我らの救いのために、天よりくだり、聖霊と処女マリヤによって肉をとって人となり……」。

この告白が言わんとすることを正しく理解することは決して容易ではないが、しかしそれは測りがたく重要である。そして、われわれの考えるところの支柱をなしている。それはそのために、「争いが事実なされねばならなかった」事柄であり「血を流すまで」争われねばならなかった性質の問題を含んでいるのである。⁽⁹⁾

三

ところで、イエス・キリストの体と云われている教会についてわれわれの考察を進めなくてはならない。問題はこの教会である。イエス・キリストを主とする教会の行為は、神の言の支配の下にあってこれに仕えるところで成立す

る。そしてその故に、その行為は神の言の証言としての意味を持つている。それが必ずしも神の言に直接的に仕えているが故ではない。そもそも証言とは神の言の説教に限定されるものではあり得ない。地上の平面における教会的存在の全体が、神の支配の下に留まりこれに仕えるのである。このことは、今までわれわれが考えてきた次の事実に応じている。人間イエスという場合、彼は肉の身体を持った全き（というのは人間以外の聖なるエレメントが混りあっていない）人間としての固有性と可能性を持った人間的主体としてこれを把えることができるし、また把えるのでなければならぬ。しかも、彼の全体が（「聖なる靈によれば……」と同時に「肉によれば……」）と云い得る彼の全体が）父なる神との関係の中で服従という意味を持っていた、という事実である。

特に強調したいのは、このキリストの支配の下で、人間は独立したその固有の領域を持つているという点である。キリストの支配に服するとは、イエス・キリスト御自身においてもそうであったように自動的に主の指示で動くという事ではない。主として受け入れこれに服することにおいて、人は人間となる道を発見する、或いは人間になる。人間的自己を回復し、人間として人間の課題を負うてゆくことが出来る、そういう道を発見するのである。つまり、福音はわれわれを一個の神にしない。或いは半神にしない。自分を神とすることなしには生きられなかった人間を、人間に引き戻し人間として生きられるようにする。つまり何らの特権・偶像を持たぬ一個の人間として生きることが可能にするのである。その場合、彼のその生き方そのものが、神の言の証言としての意味を持つに至るのである。その行為は、説教の延長でなく、その再演でもない。神の言を直接的に告知・宣言するものではない。が、それは説教の告げる神の言において成り立つ人間的である、人間独自の世界である。神の言が、神の言として受け取られることにおいてこれが成り立つ。神の言の下で、宣教・伝道と生活・実践とが教会的行為として統一を持つのである。

このように、すべての世界が主の支配の下にあると信じる教会にとっては、すべての世界が教會的領域であり、また、すべての世界(世俗世界)での行為が教會的行為と解される。この神の言を信じる信仰とこの教會の行為とは常に緊張関係の中にある。それを解消することはできない。が、その緊張関係を引き起こす神の言がこの関係を支えるのである。その場合には、信仰と行為という対立関係を持ちつつ、しかもこれを越えて信仰は行為を包括する。

ここでいわゆる自律性という問題が当然のこととして登場してくるだろう。この人間の行為について、人間世界の自律法を認めるということは避けることが出来ない。もっとハッキリ言うと、神の言において、人間は人間の世界、つまり人間中心の世界を見出すのである。それは人間が特権を持たないで、自己の自由と責任において切り開き、開拓し、営む世界である。人間の主体による人間固有の領域とはそういうことを指している。われわれはこの行為の世界を絶対化することはできない。すぎゆく相対的なものとしてこれに向き合う。しかも、これに使命を見出して生きる。福音がこれを可能にするのである。それは人間そのものの根本的な受け取り方でもある。自律的という点だが、その場合、神の言の人間の世界に関わる関わり方を一義的に規定することはできないだろう。イエス・キリストの生涯にも、彼の語られた説教、その苦難・死・復活という特殊の地位を占めるものがある。それに対応して、教会では神の言に直接的に對して直接的に奉仕をする行為がある。また道德的行為と云っても、律法による神の誠命から直接的に導き出されるものがある。しかしまた、直接的に関係せず、ある意味では神の言に對して中立性を持った世界もあるのである。しかし、その何れもが、神の言に基き、またそれを目指しているという点で共通している。すなわち、それらをすべて、先に述べた教會的行為というカッコで総括することができると考えられる。

以上述べた事柄は、人間の行為を問題にするキリスト教倫理学に對して一つの問題を提供することになるだろう。

例えば P. Althaus は、キリスト教倫理学は Dogmatik と密接な関係を持っていると云い、それを次のように説明する。教義学は与えられたもの (Gegebensein) としてのキリスト者の立場を問題にする。これに対して倫理学は課題として与えられたもの (Aufgegebensein) としてのキリスト者の問題を取扱う。与えられたもの (Gabe) と課せられたもの (Aufgabe) ʼIndikativ と Imperativʼ、賜物と要求が分ち難く結びついて、神の行為は人格的なもの、歴史、愛として現わされる。このように教義学は賜物を、倫理学はそれに基く課題を問題とするという把え方は適当だと思ふ。だが、

一、この場合、キリスト教倫理学は教義学の分野で取扱われることになる。神の賜物との密接・直接的な関わりにおいて、人間の行為、世界の秩序、その意味、その目標、方向、限界、起源が説かれる。それは主として……せよ、……すべからず、等のいわば断言的形式をとる。それは命命であるがまた事実の認定という性格を持っている。命令・要求であるが、神から与えられたものから倫理が演繹されることになる。それは、神の賜物とそのドグマが人間の行為の領域で説明・解説されるということになるだろう。或いは神の行為が人間の行為の領域で説明される、と云ってもよい。従つて、人間としてこれ以外の生き方はない、そのような道が示される。十戒が代表する律法はその典型的なものである。具体的に云うと、「互に愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい」はあらゆるキリスト教倫理の公分母となる基本的な戒めである。それは説教と直接的な関係を持ち、むしろ福音の説教の教会的実践の領土での再演という意味を持つだろう。われわれはこのような倫理学の成立を疑うものではない。むしろ重要にして基本的不可欠である。バルトやトゥルナイゼンが考えた牧会では、当然この意味の倫理が取扱われることとなるだろう。

二、だが、それでは充分ということができない。近代主義神学の提出した問題の正当性・真理性を充分に受けとめ、これに対処し得たと云うことができ難い。この問題に正しく答えるためには、神の言をその全体性において受けとめることにおいて、キリスト教倫理学は教義学の分野での倫理学であると同時に、そこから歩み出るのでなければならぬ。そして人間固有の自律的世界での、主体的人間の自由な行為が問題とされるのでなければならぬ。すなわち、実践神学において倫理学が受け取られるのでなければならぬ。そしてそこで始めて、キリスト教倫理学は十全な意味を持つこととなるだろう。そしてまた、ここでキリスト教と世俗の関係は向き合った緊張関係を持ちつつ統一の道を見出すこととなる。このような問題を事実的に取り上げた人が、福音主義神学の源流にあることをあげておきたい。例えばルターが聖書と信仰に関するおびただしい著作を残していることは周知の通りであるが、その中で彼が次のような論文を書いていることは今日注目し評価され直されなければならないと思う。「俗政府について」(一五二三年)、「共同金庫制度について」(一五二三年)、「キリスト教主義学校について」(一五二四年)、「商取引と高利貸について」(一五二四年)、「子弟の結婚問題について」(一五二四年)等々。むろんこれらの論文が今日そのまま妥当性を持つものではない。しかし、その点が実は重要なのである。相対的世界の過ぎ行く今日の教会の行為が大切なのである。キリスト教倫理はそこまでを包含する。ここに実践神学の課題があり、実践神学の分野で倫理が取り上げられているということができるのである。それは神の言の支配の下で人間を問題にすることである。しかも、人間中心の世界を承認することである。しかしそれは、神中心の立場を弱めることでなく、或いはこれを排除することではない。逆である。神中心の立場における神との関係なくしてはそれは成り立たない。それは神を神とすることにおいてのみ積極的に生かされる人間の世界である。

これらの点から屢々バルトの神学が批判されてきたことは周知の通りである。例えば、それはあまりに超越的で、究極的次元からの発言に終始している。神の行為に関心を集中する余り、人間が不在なのではあるまいか等々。これらの通俗的見解は別として、滝沢克己教授はバルトの神学に対して深い理解を示しつつ次のように言っている。「バルトにおいては、なるほどあの時あの処に立っていたひとりの人イエスについて語られてはいるが、のみならずそのイエスは親しくすべての人にかかわってかれを信ずるように呼びかけているイエスではあるが、しかしそれはどこまでもただ、神御自身が神であることをやめることなく、しかも神ではない人としてみずから語り、みずから示したもう、その面からだけ見られ、考えられたイエスである」。「肉のイエスから離れて、バルトはけっして『神の子キリスト』を考えない。しかし、それにもかかわらず、バルトにおいては、肉のイエス、人間的主体であるかぎりのイエスの、人間的主体としてのふるまい・すがたが、それとして純粋に考察されるにはいたらない」(傍点原著者)。「バルトは、『処女受胎』や『空虚な墓』を、イエスが救い主キリストであることの徴(Zeichen)だといっても、『救い主キリストである人イエス』自身について、それが徴だとはけっして言わない。かれにとつて、イエスは、徹頭徹尾インマヌエルという事柄そのもの(Sache selbst)であつて、かの三十年のあいだ彼処に生きた姿のままに、それじたいが「徴」と呼ばれることはけっしてない。一言でいうと、バルトのクリストロジーには、歴史の内部の人としてイエスについての鮮明な描写が欠けているのだ」。「バルトにおいては、イエスの『降誕』も、『死』も、『復活』も、聖書に述べられていることはすべて、ただ一度、永遠に、すべての人の救いとして生起して、今、ここにもまたそのまま現在する一つの事実、一つの根本的な『出来事』に含まれているさまさまな面や、はたらきや、その相互の區別・関係・順序のほか、何事も言いあらわしてはいないことになるのである」⁽¹¹⁾。これらの評価にもられている氏のキリ

スト解釈は十分に理解することができる。ここではバルト神学の一面性が批判されているわけだが、これに共感を覚える人は少くないだろう。が、果してこのように言ってよいだろうか。また言い切ってしまうことが出来るだろうか。かりにそのような事実が彼の著作に見られるとしても、このような批評はいささか酷にすぎると思われる。例えば、周知のように彼は、人間の働きかけ、人間の信仰に関わりがない、神の自由な一方的な恵みの選びの行為を説いている。そこでは、人間の側の行為の成り立つ余地が全くない程、鋭く徹底して神の行為が説かれるのである。が、その故に人間の固有にして最高度に責任をもった (eigentlich höchstverantwortlich) 行為が問題にされている。⁽¹²⁾ 人間が否定されているのではない。逆である。基礎づけられているのである。そこで、人間の全き肯定がある。その固有性・独立性を認めたところの徹底した人間肯定がうち出されている。しかし、それは神の行為において受け取られた、いわば否定媒介的に生かされたところの人間肯定である。彼もまたイエス・キリストにおいて「徹頭徹尾被造者であることをやめぬ一人の人」をみており、イエス・キリストは「半神となるのも、天使となるでもなく、極めて凡常（ニユヒテルン）に、極めてリアルに、一人の人」なのである。⁽¹³⁾

しかし、バルトが、教義学にたずさわる神学者として、教義学の領域で問題を取扱い、その立場から発言をしていることに注目しなくてはなるまい。この点を考慮に入れることなしに、彼の神学的叙述を批判することは適切であるとは思われない。われわれは、教義学の立場を知ることにおいて、しかも先きに述べたようにその教義学との関わりにおいて、実践神学を取り上げることができる。すなわち、実践神学の領域で倫理学を取扱うことができるのである。そのような倫理学が牧会学の対象また課題となるとわれわれは考える。それは「……すべし」という断言的命令の形をとらない。そこではベストではなくベターが目指され追求されることとなる。そしてそれは常に、「……すべし」

「……すべからず」ではなく、*Let us* という仕方で答が目指され、見出されるであろう。ということは、それが牧師一人の仕事、或いは牧師に類する指導者の仕事であるのでなく、教会の全体的課題、すべての教会に属する人々の参加する共同作業となる。むしろこのような教会的行為のために牧師は奉仕する人としての役割をここでは負うことになるだろう。それは、パートナーシップを持つといってもよい。それは神の言の役者としての（附録のようにそれにつけ加えられるものではない）重要な役目なのである。

このように、歴史神学（この場合聖書学を含める）を基礎として、教義学と実践神学との相即・統一を目指すことが、福音主義神学の課題であり、むしろ緊急な課題であり、福音主義神学においてそのことが可能であると考えられる。教会学はそこで独自の領域を持ち、福音主義神学は教会学において充実・結実を持つと同時にもろもろの神学に対して問題を提起し生命を持った神学の営みをなす道を開くこととなる。

附記 これは昭和四十年三月定年退職された原野駿雄先生の御意志によって設定された実践神学に関する「原野教授記念講座」の第一回公開講演（昭和四十一年一月十八日）において行なったものを原稿にしたものである。なお、これを『神学研究』十三号の拙稿「教会学の領域について」と併せ読んで頂くことができれば仕合せである。

注

(1) 「福音主義神学」に関しては、主として *Karl Barth: Einführung in die evangelische Theologie*. による。なお、同著者の「教会教義学」一ノ一を参照した。

あなたはあなたのうちに存する凡てのものと共に永遠に滅亡を免かれ得ない、とあなたの神があなたに語るのをあなたが聞くような説教だ。「神の言のみ」に基く説教の重視は徹底していると思われる。

(2) 同書一三頁。

(3) ルターはこれを説明している、「その説教は、あなたの全生涯とあなたのあらゆるわざとが神の前に無であり、むしろ、*Der Dienst der Gemeinde*. なら *F. Thurneysen: Die Lehre*

福音主義神学における教会学の成立と展望 (藤井)

von der Seelsorge.

(5) トゥルナイゼン、同掲書一章。Seelsorge als theologisches u. kirchliches Problem. 参照。

(6) 同書九頁。

(7) P. Tillich: Systematic Theology I, p. 174. The Word of God, in "Language: An Enquiry into its Meaning and Function". p. 122.

(8) 例えば次の文章を読んでもみると「御言葉」の用法に関する整理が必要であることは明らかであろう。神の言と神の言に關する人間の言語による証言(主として説教の言葉)とが区別されていなく、この聖礼典において、神は御自身を、われわれの愚かさをもつても、なお知ることのできるまでに、明らかに示し、われわれに対するいつくしみと愛とを、御言葉をもつてする以上に、明白に証したもうのである。「そのようなわけで、主の隣れみとその恵みの保証とが、かれの聖なる御言葉においてと同じく、聖礼典においても、われわれに差し出されているのは、確定したことである」。(カルヴィン、『キリスト教綱要』、第四篇第十四章七。渡辺信夫訳三二八頁、三二九頁)。「神学研究」第十四号拙稿「ことば」参照。

(9) バルト『教義学要綱』、井上良雄訳、一六八頁。世々の教会がその戦いの中で聖書のメッセージを明確に云い表わしてきたこのような伝承にわれわれは盲目であってはならないと思

う。世界教会信条から次の一つを挙げておく。

「この故に、我らは、聖なる教父らに倣い、凡ての者が声を一つにして、唯一人のこの御子、我らの主イエス・キリストの、実に完全に神性をとり完全に人性をとり給うことを、告白するように教えるものである。主は、真に神であり真に人であり給い、人間の魂と肉をとり、神性によれば御父と同質、人性によれば主は我らと同質、罪をほかにしてすべてにおいて我らと等しくあり給い、神性によれば代々の前に聖父より生れ、人性によれば、この終りの時代には、主は我らのためにまた我らの救済のために、神の母である処女マリヤより生れ給うた。この唯一のキリスト、御子、主、独子は、二つの性より(二つの性において)まざることなく、かけることなく、分けられることもできず、離すこともできぬ御方として認められねばならないのである。合一によって両性の区別が排除されるのではなく、かえって、各々の性の特質は救われ、一つの人格一つの本質にともに入り、二つの人格に分かれたれ割かれることなく、唯一人の御子、独子、言なる神、主イエス・キリストである。これは、はじめから、預言者らまた主イエス・キリスト御自身が懇ろに教え、教父らの信条が我らに伝えた通りである」。(カルケドン信条)。

福音主義教会信条から次の二つを選んで記しておくこととする。

「われらの諸教会は、かく教える。御言、すなわち、祝福せられた処女マリヤの胎の中で、人性をとり給うた神の御子は、単一なるペルツナの中に、不可分的に結合した二性、すなわち神性と人性とがあり、一人なるキリストは、真の神であつて、真の人である」と。(アウグスブルク信仰告白)。

「私は、父から永遠に生れ給うたまことの神にして、またおとめマリヤから生れたもうたまことの人なるイエス・キリストは、私の主であると信ずる」。(小教理問答書)。

なお、われわれがここで問題にした人間理解については、創造の秩序と恩寵の秩序、三一論、福音と律法、教会論等の命題で説明することが可能であると思う。が、キリスト論によるのが最も適切であると思われる。

(10) この点については特に『神学研究』十三号「教会学の領域について」を参照。

(11) 『聖書のイエスと現代の思惟』一六〇頁—一六一頁。一六三頁。

(12) K/D一ノ一、一六七頁其他。

(13) Dogmatik im Grundriss. 井上良雄訳一六五頁参照。「彼(イエス・キリスト)の人間性は、人間性そのものである。一切の *humanitas* の精髓である。概念或いは理念としてではなく、決断として、歴史として、そのようなものである。キリストは人間そのものであり、従って一切の人間存在の基準であり、規定であり、限界づけであり給う」(一七六頁)と云われている。